

◆ かつば民話シリーズ⑬ ◆

厚木宿のかつば屋

あつぎじゆく の かつばや



作:近藤せいけん



相模の国に相模川、中津川、小鮎川の三つの川が集まる所に河童村「三流（さんりゅう）」がある。

村長は太郎かっぱで、多くの村の衆が住んでいる。

三流は人間界から見えない、まぼろしのかっぱ村です。

足をすべらせ、川で溺れていた、村人のうし松を助け、これをきっかけに、兄のうま松の兄弟に、かっぱ村に自由に通行する、手形を渡した。そして、かっぱ村の野菜、漬物、川魚、海魚類の物産の取引を認めた。そして、厚木宿に店舗を出すために真珠球を渡し、店舗をかまえるお金に変えるように言い聞かせた。兄弟は早速、真珠球を小判に代え厚木宿のお店を探し始めた。

「兄ちゃん、夢みたいだ。河童村「三流」の村長太郎かっぱからいただいた、真珠球がこんなに沢山の小判と代えられ、お店を買う代金になるとは」

「うし松、この事はだれにも話してはならないぞ。海で集めたという事にして、かっぱ村の話はしてはならないぞ」

「それにしても、赤ひげ先生にいただいた、特効薬があんなに早くきくとは、ありがたや、ありがたや！」

「かかも元どおりに元気になり、皆、喜んでいる」

「うし松、かっぱ村の皆の衆のご恩は忘れてはならないぞ」

「うん、うん。けして忘れない。かっぱ村のためになるように、がんばるよ！」

「そうだ、そのいきだ」

口入れ屋の斡旋により、厚木宿の一角に店舗を購入できることとなり、いよいよ、開店の運びになった。

店の名前は「かっぱ屋」扱う品は、野菜を中心に漬物、である。八百屋である。

新鮮で、値段も安く、開店いらい評判となり、連日売り切れで、押すな、押すなの人気店となった。

並んでいる、お客様からいろんな声上がる。

「かっぱ屋さん、いつも品切れでは、もったいない、もっと店頭に並べてくれ」

「こんな、立派な野菜、漬物、どこで取れるのだい？」

「もっと、作ればいいじゃないか」

「毎日でもくるよ、品切れだけはかんべんしてよ」

お客さまの評判はますます上がってゆくのだった。

「太郎村長と相談をして、この付近の農家にも、栽培方法を伝授してもらい、相模の名品にしよう」

「それは、いい考えだね！」

今日も相模の国、厚木宿の「かっぱ屋」には多くのお客が押しかけている。

(終わり)